

誰もが全力で接戦を楽しむ 大学体育ソフトボール授業の教育実践記録

木内敦詞¹⁾

Teaching portfolio for a university physical education softball class where everyone gives their all and enjoys a close game

Atsushi KIUCHI¹⁾

本稿の概要

ティーチング・ポートフォリオ (Teaching Portfolio: TP) は、自らの教育活動について振り返り、自らの言葉で記し、多様な根拠資料によってこれらの記述を裏づけた教育業績についての厳選された記録である (栗田, Online)。日本において、TP は 2008 年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」で取り上げられ、教育活動の可視化および多面的な教育業績評価のツールとしてその有用性が認められている (皆本, 2016)。その普及に先駆的に取り組んでいる大阪公立大学工業高等専門学校 (高専)TP 研究会による第 27 回 TP 作成ワークショップ (WS) が、2022 年 9 月 6 日～8 日、Zoom によるオンラインにて開催された (早川ほか, 2024)。本稿の目的は、その WS へ受講者 (メンティー: メンターによるメンタリングを受ける者) として参加した著者が 3 日間の WS を通じて作成した TP を提示することである。大阪公立大学高専 TP 作成 WS はその第 1

回が 2009 年に開催され、第 2 回以降は WS 修了者がメンターを務め、年 2-3 回ペースで継続展開されている。WS 参加申込者 (メンティー) には参考図書「ティーチング・ポートフォリオ スターターブック (大阪府立大学高専ティーチング・ポートフォリオ研究会編, 2011)」が送付され、メンティーはそれを参照しながら、スタートアップ (SU) シートへの事前回答を求められた。SU シートの目的は、メンティー自身の教育活動の整理とエビデンスの収集、そして簡単な振り返りであった。その内容は、メンティーが関与する全ての教育活動を挙げた後、各々の概要や、それらすべての教育活動に共通する方法や方針、それらにおける独自の工夫やその理由、学生に身につけてもらいたいこと、自身の教育活動に関する短期的・長期的なゴール、最後にこのシート作成所要時間であった。この SU シートをベースに、各メンティーにつくメンターとともに。朝から夕刻まで 3 日間の WS が展開された。最終的に作成した TP を提出し、基準をクリアした合格者に本 WS の修了

1) 筑波大学体育系

Institute of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

証が授与された。TP作成を通じて整理された著者の教育理念（資料1）は、「誰もが全力でスポーツを楽しみ、スポーツで考え、スポーツで成長できる、社会の縮図を体験できるような体育授業を創ること」であった。また、それを支える教育方針は、「他者と知恵を絞って協働する姿勢」、「全力で物事に取り組む態度」、「失敗や成功の体験から学ぶ習慣」であった。以下では、まず、大阪公立大学高専 TP作成WSの概要を述べた後、そこで作成された著者のTPを掲載する。

大阪公立大学高専 TP作成WSの概要

(1) WS前に提出するSUシート

このシートの目的は、自身の教育活動の整理とエビデンスの収集、そして簡単な振り返りを行うことであった。そこへ記入する情報は、WSでの自身の作業に用いるだけでなく、メンターが参加者のことをよく知り、よりよいメン

タリングを行うためにも重要な意味を持つこと、そしてSUシートを丁寧に作成することは、PFの質を確実に高めるとの説明が付されていた。記入内容は、メンターチーム以外に許可なく公開されることはないことが明記されていた。以下にSUシートの項目と内容を示す。

- ①参加者の氏名、所属、役職、現在の大学の在籍年数、メンターに伝えたいことを自由に
- ②参加者がTP作成する目的
- ③参加者の所属大学の教育目標等について
- ④参加者が関与するすべての教育活動について：1 過去数年の担当授業科目について（名称、受講者数、学年、必修／選択の別、授業概要）；2 それ以外の教育活動があれば、その概要；3 卒業研究（学部・修士・博士）担当の場合はその概要；4 過去数年に担当した委員会活動（学部・学科レベルのもの含む）の名称と概要；5 過去数年に担任、クラブ（サークル）活動支援を実施している場合は

資料1 ワークショップ発表のカバーページ

ティーチング・ポートフォリオ（カバーページ） 木内敦詞（筑波大学体育系） 27th TP作成WS 2022/9/8

文武徳三道

理念

運動技能、体格/体力
運動経験、コミュニカ
障がい、年齢、性別
によらず

共生
社会

人との繋がり
TA—学生—教員
協働的、民主的
開放的、改革的

方針

他者と知恵を絞って
協働する姿勢

失敗や成功の
体験から学ぶ習慣

全力で物事に取り組む態度

誰もが
全員で
スポーツを楽しみ
スポーツで考え
スポーツで成長する

社会の縮図を体験できる授業

目標 大学体育TP研究で科研費申請 2024
大学体育TP集の書籍化 2027
大学体育TPの普及 今から徐々に
体育必修回帰大学の増加 徐々に



ワクワク/ドキドキ感はスポーツの醍醐味

知恵を絞って全力で全うに戦った体験を言語化

自己体験を風化させず、明日に活かし続ける

責任 共通科目「体育」ソフトボール担当
体育センター正課体育委員長
大学体育スポーツ高度化共同専攻

方法 誰もが全力で接戦を楽しめるゲームに向けた
ルール修正プロジェクト・ミーティング
個別具体的な体験の言語化レポート

成果 前任校の体育の必修回帰
FDアンケートや心理尺度スコア
大体連優秀論文賞/教員賞

その概要；6学協会等の委員等を委嘱されている場合は、その名称と概要；7学外ボランティア活動等実施の場合はその概要

- ⑤以上にあげた教育活動について：1共通する方法や方針について箇条書きで挙げる；2特定の授業科目における独自の工夫等，特徴的な方補や方針があれば，該当授業科目を明示するとともに，箇条書きで挙げる；3卒業研究指導や研究室運営における独自の工夫等特徴的な方法や方針を箇条書きで；4この1-3で挙げた方法や戦略をとっている理由
- ⑥TP作成において用意できるエビデンスに○をつける。追加事項加筆可能
- ⑦これまで行ってきた教育改善の実績（教材御開発等）について
- ⑧参加者の授業を受けた学生や指導学生に，どのようなことを身につけてほしいか，またはどのように変わってほしいか
- ⑨教育活動に関する今後の目標を，短期的ゴールと長期的ゴールに分けて。
- ⑩以上のTPスタートアップシート作成に要した時間

(2) TP作成WSの3日間のスケジュール

TP作成WSのスケジュールを表1に示す。初日オリエンテーション後，メンティーは数回のメンターとの個人面談（メンタリング）を交えながらTPを作成する。研修受講者がTP作

成を個人で行なっている間，メンターの先生方はそれぞれが担当する受講者の進捗状況を報告しあい，どのようにサポートしていくかについて，スーパーバイザーとも相談するメンターミーティングが行われていた（早川ほか，2024）。さらなる詳細は，早川ほか（2024）によるTP作成WSの開催報告を参照されたい。

以下に，著者が初めて作成した2022年9月時点のティーチング・ポートフォリオ（TP）を掲載する。なお，WS最終日のTP提出期日（2022年9月8日）時点で集計が間に合わなかったデータを，その後一部追記している。

ティーチング・ポートフォリオ

木内敦詞（筑波大学体育系）
2022年9月8日作成（初版）

TPの構成

本TPは以下6項目で構成される：I 教育の責任，II 教育理念，III 授業の目標と方法，IV 成果と評価，V 今後の目標，VI 添付資料。（これらは，著者が提出した実際のTPでは，表紙の次のページに「もくじ」として記載されている。）

はじめに

このティーチング・ポートフォリオ（以下，TP）は，これまでの大学体育教員としての活

表1 第27回ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ日程

2022/9/6火	2022/9/7水	2022/9/8木
9:00-9:50 オリエンテーション	9:00-10:00 TP作成作業（各自）	8:45-9:45 TP作成作業（各自）
10:00-12:00 TPチャート作成WS	10:00-11:00 第3回個人ミーティング	9:45-10:45 第5回個人ミーティング
12:00-12:45 昼休憩	11:00-12:00 TP作成作業（各自）	10:45-11:45 TP作成作業
12:45-14:15 第1回個人ミーティング	12:00-12:45 昼休憩	11:45-12:30 昼休憩
14:15-17:00 TP作成作業（各自）	12:45-14:15 中間発表＋意見交換会	12:30-13:15 よいメンタリングに必要なこと
17:00-18:00 第2回個人ミーティング	14:15-17:00 TP作成作業	13:15-14:45 TP作成作業＆プレゼン準備
18:00-19:00 TP作成作業（各自）	17:00-18:00 第4回個人ミーティング	14:45-16:30 プレゼンテーション
19:00-20:00 夕食休憩	18:00～ TP作成作業（各自）	16:30-17:00 修了式
20:00-21:00 意見交換会	23:00 TP第2稿提出締切期限	19:00-20:30 修了を祝う会（任意）
21:00～ TP作成作業（各自）		

TP：ティーチング・ポートフォリオ WS：ワークショップ

動を振り返り自身の原点を確認することで、明日からのよりよい教育実践へと繋げることを目的に作成されたものである。まずは自己紹介を兼ねて、現在の私の教育理念に繋がっているようなエピソードを5つ、自分史チックに時系列で示す。

1973～82年（6～15歳） 勉強かスポーツかの二者択一志向への反発と、文武徳三道

小学生の頃、兄の通知簿には5が並び、私の通知簿には体育と図工の5が燦然と輝いていた。兄は学者で私はスポーツ選手という周囲の評価は、私には心地よくなかった。「勉強かスポーツの二者択一」志向への反発心は、今も変わらない。これは、次々項「II 教育理念」の「文武徳三道」や「スポーツを楽しみ、スポーツで考え、スポーツで成長する」に通じる（資料1）。文武徳三道は、前任校・大阪工大野球部のクラブポリシーとしても継承されている（大阪工業大学硬式野球部、Online）。

1991年（24歳） 大学体育教員になった年の大学設置基準の大綱化

修士課程修了後、大阪工大工学部一般教育科体育研究室の助手に採用された1991年は、折しも大学設置基準大綱化の年であった。これを受けて各大学では、それまで2年間4単位（実技と講義を各2単位）の体育を縮小し、総じて選択化するケースが増えた。体育を専攻しない一般の大学生が体育で何を学ぶのか、大学でなぜ体育があるのかを考え始めたきっかけは、大学体育教員になったそのタイミングでの大学設置基準大綱化であった。

2000～2013年（33～46歳） 大学体育授業の改善を理解し、必修復活を後押ししてくれた卒業生

大阪工大で1994年以降、選択となった教養体育科目は、20年後の2014年に1年次（1年間）の必修が復活した。これは、健康体育研究室メンバーによる授業改善や教育研究の推進だけでなく、敏腕教務課職員A氏の影響も大きかった。A氏は1991年当時に学生として受講した私の

体育授業の無法状態と2000年以降の体育授業の改善ぶりを、教務課にいることから肌で感じていたという。そのことを、2010年ころだったのだろうか、私に話してくれた。

2014年（47歳）～ 大学体育の充実への使命感（大学体育スポーツ高度化共同専攻の設置と運営）

大学体育の授業改善を題材に44歳で博士（教育学）の学位を取得したことは、3年後の現職（筑波大学体育系教授）への採用に直結した。主な職務は、体育専門学群以外の学生対象の共通科目「体育」の授業担当と、鹿屋体育大学との「大学体育スポーツ高度化共同専攻」の設置および運営（教育と研究）である。よりよい大学体育授業の実践や、日本の大学で教養体育を存続・発展させるための働きかけは、今の私の使命だと心得ている。

2016年（49歳） 健康教育系の大工大体育から、スポーツ教育系の筑波体育へのシフト

筑波大へ異動した3年目（2016年）の体育授業（ソフトボール）で、運動が苦手な女子学生が、私の体育授業観を転換させた。走者を得点圏に置いた試合の山場で、集中したキリッとした表情で打席に立ったあの姿、そして見事に適時安打した後の塁上での気の高ぶった凜とした表情が忘れられない。その瞬間に遭遇したことをきっかけに、筑波大では「スポーツ教育」を重視したくなった。この視点は、筑波大の共通体育を担当する体育センターの教育理念「筑波体育（資料2）」とも一致するので、自然な流れであったともいえる。

I 教育の責任

2022年現在、以下が私の教育の責任として位置づけられる。

- ・共通科目「体育」の授業担当と授業運営（体育センター正課体育委員長）
- ・体育専門学群生（学士課程）の卒論研究指導
- ・体育学学位プログラム（修士課程）の授業担当と修論研究指導

資料2 筑波大学共通科目「体育」の教育理念および目標

教育理念	健やかな身体, 豊かな心, 逞しい精神を育む筑波体育	基礎体育		
		1年次	2年次	3年次
教育目標	1. 健康・体力およびスポーツ技術に関する基礎的知識や思考力, 実践力の養成	◎	○	○
	2. 豊かな心と社会性(コミュニケーション力, リーダーシップ等)の醸成	◎	◎	○
	3. 逞しい精神, 高い倫理観の育成	◎	◎	◎
	4. スポーツ文化の知的解釈力・鑑賞力の涵養	○	◎	◎
	5. 自立的に自己を成長させ続ける力の涵養	○	○	◎

◎は主な教育目標, ○は副次的な教育目標として位置づけられ, 学年進行による段階的カリキュラムとなるよう配慮されている。

- ・大学体育スポーツ高度化共同専攻(博士課程)の授業担当と博論研究指導
- ・硬式野球部の顧問(部長)

このように, 学士/修士/博士の各課程の教育・研究に関わっているが, 本TPでは学士課程における共通科目「体育」, いわゆる「教養体育/一般体育/大学体育」として開講される授業のうち, 2022年に担当したソフトボールの授業の教育実践について記載することとする。ソフトボールと卓球の2種目を担当していたところ(2014~2019年度)のティーチング・アシスタント(TA)の言葉「木内先生の授業はソフトボールも卓球も共通してるんですね」は, 私の体育授業が種目によらないものであることの裏づけだと捉えている。

II 教育理念

資料1に示すとおり, 私の教育理念は「文武徳三道」という言葉に集約できる。文へも武へも徳をもって取り組む青年になってほしい。具体的には, 「誰もが全員で, スポーツを楽しみ, スポーツで考え, スポーツで成長できる, 社会の縮図を体験できる場となる授業」を実現したい。

「はじめに」の5つ目に示したエピソード(運動の苦手な女子学生のプレイぶり)から, スポーツの最大の魅力は, うまくいかどうかわからない場面で成功/失敗するワクワク/ドキドキ感, すわなち「スポーツを楽しむ」ことだと考えている。

2つめの「スポーツで考える」ことも, 楽し

みの増幅につながると感じている。めざす授業像として, 「誰もが全力で接戦を楽しめるソフトボールゲーム」を位置づけ, それに向けたルールの改定を, 2022年からは学生同士の議論を通じて行っている。各回授業での経験/体験を通じた学びのレポートは, 自己成長感への繋がりを意図したものである。

3つめの「スポーツで成長する」ためには, 運動技能の優劣や障がいの程度, 性別などにかかわらず「誰もが」, しかもそれを1人ではなく人と人との繋がりを感じながら「全員で」行うことが大切だと考えている。これは, 現代社会における共生社会のめざす方向性に近いものであり, 社会の縮図を体験する場としての体育授業の備えるべき観点である。

以上の教育理念の実現に向けた方針として, 「他者と知恵を絞って協働する姿勢」, 「全力で物事に取り組む態度」, 「失敗や成功の体験から学ぶ習慣」を位置づけている(資料1)。

III 授業の目標と方法

めざす体育授業像「誰もが全力で接戦を楽しめるソフトボールゲーム」(資料3)の実現に向けて, 以下の具体的な方法で授業を展開している。

■「各回の授業での学び」や「学期を通じた自己成長」をレポート

筑波大学の1時限75分は, 多くの他大学と比して授業時間が短い。コロナ禍ながらも対面授業再開した2020年秋学期より, 授業内での活動時間を確保するため, 授業終了時の振り返

資料3 つづき

全員が全力で接戦ゲームを楽しむために、ゲーム条件をどのように修正できるか、知恵を絞ろう！

ゲーム条件の修正オプション (Richardson, 2021)		課題★全員が全力で接戦を楽しむために、どのような修正案が考えられますか？	
ネット型	ゴール型	スペース	ベースボール型
スペースを減らすためにベースラインやサイドラインを移動する。	プレイエリアを拡大/縮小する。	スペース	
片方のサーブボックスに落とすことができれば得点とする。何点か有る状態でスタートする。サーブでは得点できないようにする。	ゴールから一定の距離からのシュートが得点になるようにする。ゴールを大きくしたり小さくしたりする。1点のアドバンテージをもらう。	得点	
プレイヤーを加える/減らす。利き手ではない手でプレーする。	プレイヤーを加える/減らす。	プレイヤー	
自分自身でボールをつなぐことを許可したり、自陣内でのヒット回数を増やしたりする。バウンドやキャッチでのプレーを可にする。投げ入れてサーブする。	手で触れない距離でディフェンスをするよう制限する。必要なタッチやパスの回数を変更する。	ルール	

これが期末レポートです。あなた個人の修正オプションやこんな場合にこんな修正が面白そう、など。

健康管理シート 毎朝の体温測定と歩数測定を、コロナ禍のこの際、習慣づけましょう。継続して記録していくことで、自身の健康管理意識の高まりが見込まれます。歩数は、スマートフォンの無料アプリを使うなど、各自で工夫してください。100円ショップの歩数計でも構いません。▼以下はオプション課題→スマートフォンに過去の歩数データの記録がある人は、右側にこれまでとこれからの日歩数を記入してください。

2019年

体温	wk1 4/18~	wk2 4/25~	wk3 5/2~	wk4 5/9~	wk5 5/16~	wk6 5/23~	wk7 5/30~	wk8 6/6~	wk9 6/13~	wk10 6/20~	
月	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	
火	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	
水	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	
木	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	
金	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	
土	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	
日	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	
測定日数	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	4-6月の体温測定日数↓
平均体温	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	日

歩数計測手段→ 例) iPhone ヘルスケア、apple watch

歩数	wk1 4/18~	wk2 4/25~	wk3 5/2~	wk4 5/9~	wk5 5/16~	wk6 5/23~	wk7 5/30~	wk8 6/6~	wk9 6/13~	wk10 6/20~	
月	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	
火	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	
水	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	
木	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	
金	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	
土	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	
日	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	
測定日数	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	4-6月の平均日歩数↓
平均日歩数	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩

り記述を行わないこととしている。その分、授業の翌日正午までに、LMSのmanabaへミニレポートの提出を求めている。体育授業における学びの視点（資料3）を毎回のミニレポートを課す際に提示し、それをヒントに授業内での学びを振り返ることにしている。また、最終回授業終了1週間以内に、学期を通じた学び（自己成長）についても振り返り、最終レポートの提出を求めている。体育授業の学修時間を授業時間内だけでなく授業時間外に求めることは2つの意義がある。スポーツ活動での経験や体験を通じた学びを日常生活に活かす視点を学修者に定着させる教育的意義と、授業外学修時間を含めた単位換算による単位の実質化を果たす教務的意義として捉えることができる。

■人と人の繋がりを重視

体育授業の学びは、他者との協働があってこそ成立するものだと考えている。そのため、まずは受講学生同士の繋がりや声掛けを重視している。班内ミーティングやチーム内ミーティングを必ず組み込むとともに、各回授業での最優秀選手（MVP）を合議のうえ取り決め、選定理由を添えて発表し、本人からのコメント発表の場も設定している。

学生同士の繋がりはもちろんのこと、学生と教員との関係性も、学修成果を左右する大きな要素だと考えている。練習やゲームでの「いい声掛け」「いいプレイ」「いい行い」はその場で褒めるようにしている。授業内で全員と話すことはなかなか難しいので、始業前の出席確認の時間での会話でそれを補うよう務めている。

■ゲームでのドキドキ／ワクワク感を重視

1点を争う接戦の場面で、捕れそうにない打球を見事に捕球したり、走者を置いた場面で適時打を放ったりするようなドキドキ／ワクワク感は、日常生活では得ることのできない特別な体験で、体育授業の醍醐味だと考えている。ドキドキ／ワクワク感の体験のためには、チーム編成で偏りがどうしても生じてしまった場合でも、アウトカウントや守備の取り決め（ルー

ル）を柔軟に設定することで、接戦化することができる。そのためのルール修正を次項のように行っている。

■運動技能の優劣によらず全力で挑戦できる条件の設定

技能の低い者がまったく活躍できなかつたり、技能の高い者が手を抜かなければならないような方法で接戦化を促すことは、全員が全力で挑戦することを放棄することになってしまう。たとえば、なかなか安打できない学生は、一塁ベース手前2-3mに併設したサブベースを使用したり、自身の打球は1バウンド後にしか守備陣は捕球できない設定にしたりすると、打率5割も夢ではなくなる。一方で、野球経験者のなかでも上級者の打球は、内野守備陣を危険に晒すことになるため、長期使用を経て固さを失った廃棄処分前のボールを使用することも提案している。超強打者が全力で打ってもなかなか本塁打にはならず、守備陣は安全に捕球できたり、打ちとりやすくなったりするため、その打者も知恵を絞って全力でプレイしないと安打できない状況になる。技能の優劣によらず誰もが全力で打って走って投げて挑戦できる場となるよう、ルールを柔軟化したり困難な面白い規制を設けるような工夫を班員で議論しながら目指す授業像へと向かうよう、LMS上や雨天時の体育館で試合を待つ時間を用いた（資料3）。

■独自の特徴的な方法や方針

・正式ルールにとられないグラウンド設定（フェアゾーンの縮小）

初期段階においては、1チーム9-10人で対戦するという固定概念にとられず、5-6人の班対抗でゲームをすることで、打撃回数や守備機会を増やすようにしている。そのためには、1塁-本塁-3塁を結ぶフィールド角度を正式の90°ではなく、1塁-2塁-3塁-本塁の正方形は維持しつつ、フィールド角度60°に縮小している。これによって、正式ルールよりも少ない人数同士で打撃回数と守備機会を全員に保証しながら、ゲームの中でルールやプレイを学

ぶ場となるよう工夫している。

・習熟段階に応じた用具の選定（ボール、バット）

フェアゾーンを60°に縮小するようなミニゲームを行う際、ボールをより柔軟なものにすることで、守備力が未熟な受講者でも安心して内野守備につくことができるようになる。また、打撃するバットについても、ティーボール用の柔軟なバットを用意することで、飛び抜けた打力を持つ学生が全力でスイングしても打球速度が緩和され、内野手の守備機会を増やすことができる。正式なルールに近づけて行うゲームでも従来の白いゴム製ボールよりも柔軟で安全性を高めつつも打球感が維持された「学校体育3号球（資料1の背景図）」を使用している。

・安全第一の設定（投手前の防球ネット、大判ベース）

スローピッチソフトボールのゲームであっても、投手強襲の打球による負傷が生じる。これを防ぐため、学校体育3号球を使用することに加えて、投手と打者の間に高さ1.8メートル×幅0.6メートルの防球ネットを設置している（資料4）。また、内野ゴロでの封殺（フォース）プレイや触球（タグ）プレイにおける、野手と走者の交錯による怪我を防ぐため、通常ベースの4倍の面積の大判ベースを使用している。

・雨天時の体育館内でのガチンコのティーボールゲーム（公式記録あり）

雨天時は球技体育館（バレーボール場）を使

用させてもらっている。これによって、天候やグラウンド状況の悪い日も、実技を確実に行うことができる。この場合、ドリル→試合→ミーティングを、6つの班がローテーションすることとしている。ティーボール用のバットとボールを利用した室内野球を行う場合も、グラウンドでの試合と同様に、公式記録をつけている。公式記録は、安打数、塁打数、打点である（資料5）。

・授業中の歩数計測

授業時間内に歩数計を装着させている。これは、1コマの授業でどれだけの歩数に相当するかという身体感覚を身につけてもらうことが1つのねらいである。しかしそれ以上に、体育授業への意欲を測るものとして位置づけ、評価の一部として用いることとし、そのことを学生にも説明している。

・養生テープの名札装着

人と人との繋がりを重視したいことから、毎回の授業で養生テープに名前を書いたものを名札代わりに用いている。学生同士でも教員と学生の間でも、互いに名前を呼び合うことは、協働姿勢の第一歩だと捉えているからである。

・成績評価の観点と評価材料

筑波大学体育センターでは、共通科目「体育」の成績評価の観点と配点を、技能35点、知識30点、態度35点の100点満点としている。観点ごとの評価方法は各教員に委ねられている。

資料4 ソフトボール授業の様子



資料5 ソフトボールの簡易スコアシート
 (元東京理科大学教授・丸山克俊先生のスコアシートに倣ったもの)

主審 _____ 試合時間 _____ : _____ ~ _____ : _____ 分

チーム	1	2	3	4	5	6	7	計		

先攻チーム

氏名	1	2	3	4	5	安打	塁打	打点
1								
2								
3								
4								
5								
6								
7								
8								
9								
10								
11								
12								

MVP (選出理由)

後攻チーム

氏名	1	2	3	4	5	安打	塁打	打点
1								
2								
3								
4								
5								
6								
7								
8								
9								
10								
11								
12								

MVP (選出理由)

ソフトボール簡易スコア記録方法

	アウト ゴロ
	アウト フライ
	アウト ライナー

	打点1 ゴロアウト
	打点1 フライアウト
	打点1 ライナーアウト

	シングルヒット
	二塁打
	三塁打
	ホームラン

	エラーヒット 打点1
	エラー二塁打 打点2
	エラー三塁打 打点3
	エラーホームラン 打点4

★特記事項

私の授業では、技能 35 点は、各回授業中の歩数に基づき、評価している。知識 30 点は、コロナ禍での対面授業受講条件の毎日の体温測定と体調管理をミニレポートとして評価している。態度 35 点は、各回授業翌日正午までの「授業内経験を通じた学びの記録」レポートに基づき、評価している。

IV 成果と評価

■授業アンケート

全学共通のアンケート 4 項目に加え、体育センター設定 35 項目の合計 39 の質問を、学期終了時期に行っている。その結果を体育センターの教育目標 5 項目（資料 2）に照らして集計した結果は（資料 6）のとおりである。全学共通の 4 つの設問では、5 点満点で 4.7-4.9 点であった。共通体育独自設定の 35 の設問（6 点満点）では、「学生自身の意欲」5.6 点、「授業の計画や運営」5.5 点、「授業の指導法」5.6 点、「筑波体育の教育目標の達成度」5.3 点であった。また、学生が自身の成長を促したと感じている体験を具体的に記述してもらったところ、筑波体育の教育理念や、主観的恩恵評価尺度の下位因子ご

とに整理したところ、それらの項目以外に、「挑戦することの大切さの実感」や「スポーツで考えることの重要性」が抽出された（資料 7）。

■質問紙調査

1) 大学初年次体育授業の主観的恩恵評価尺度（PBS-FYPE：西田ほか，2016）で大学体育授業における学び 5 因子を、2) 大学体育授業動機づけ雰囲気尺度（永田ほか，2015）で成績志向的雰囲気と熟達志向的雰囲気を、3) 大学体育実技経験評価尺度（島本・石井，2007）でライフスキル獲得に寄与する体育授業での経験 4 因子を、それぞれ評価した（資料 8）。1 年次対象の 1 クラスのみの調査のため、学修成果を裏づける十分なサンプルサイズのデータとはいえないものの、信頼性と妥当性の検証された各尺度基準値との比較は重要と考えた。集計と分析の結果、ライフスキル獲得への寄与の示唆される「自己開示」「他者協力」「挑戦達成」「楽しさ実感」の経験は、基準値と比較しても有意に高値であった。また、体育での学びの知覚（主観的恩恵評価尺度）や熟達志向的雰囲気のスコアの双方が先行研究の基準値よりも有意に高いものであった。Cohen の d （効果量）について

資料 6 授業アンケートの集計結果（木内，2020）

全学共通の設問 4問（5点満点）	（点）
授業の準備は十分にされていたか。	4.9 ± 0.4
教員の説明や授業の進め方は適切だったか。	4.7 ± 0.5
授業を通じて、この科目に関連する分野への興味や関心が高まったか。	4.7 ± 0.6
総合的に判断して、この授業を受講してよかったと思うか。	4.8 ± 0.4
共通体育の設問 35問（6点満点）	
【学生自身 2問】授業への出席状況はよかった。熱意ある態度で授業に取り組んだ。	5.6 ± 0.8
【授業の計画や運営 7問】学習目標の明確さ、授業と学生の関心の対応、シラバスを含めた授業の計画性、テーマ内容の適切性、授業の流れや時間配分の適切性、成績評価基準の明示、施設や用具の適切性	5.5 ± 0.8
【授業の指導法 6問】教員の知識と専門性、理解しやすい指導、授業運営の工夫、熱意ある指導、学生とのコミュニケーション、学生の体力技術水準を考慮した授業展開	5.6 ± 0.9
【筑波体育の教育目標の達成度 20問】	5.3 ± 0.9
1. 健康・体力およびスポーツ技術に関する基礎的知識や思考力・実践力の養成(4問)	5.4 ± 0.7
2. 豊かな心と社会性(コミュニケーション力、リーダーシップ等)の醸成(4問)	5.5 ± 0.8
3. 逞しい精神、高い倫理観の育成(4問)	5.2 ± 1.0
4. スポーツ文化の知的解釈力・鑑賞力の涵養(4問)	5.1 ± 1.1
5. 自立的に自己を成長させ続ける力の涵養(4問)	5.1 ± 1.0

全学共通の設問(1 大いにそう思う1~5 全くそう思わない)については、数字を逆転し得点を与えた。

共通体育の設問(1 とても~6全く)については、数字を逆転し得点を与えた。平均値±標準偏差で示す。

資料7 自己成長を促した体験に関する学修者の記述回答（木内，2020）

筑波体育① 健康およびスポーツ技術に関する基礎的知識や思考力、実践力の育成 33件		
運動スキル・練習方法の習得 15件	体力・身体活動の増強 10件	規則的な生活習慣の確立 8件
野球部でもないのに本格的なプレイになっていて楽しかった。野球経験のある人に素振りを見てもらったりして打撃が上達した。回を追うごとに個人技能の能力の上達がわかり、後半になるにつれてゲームを楽しめた。など	毎回の授業で歩数計をつけて活動するので、内で意識的に動くようになった。外野でたくさん走ったので、走力や持久力がついた。受験で鈍った体をほぐすことができた。など	身体活動計画のおかげで、ウェイトトレーニングへの意識が向上した。適度の運動することで体調管理できるようになった。ここ授業に向けて筋トレするようになった。家でトレーニングするようになった。など
筑波体育② 豊かな心と社会性の醸成 35件		筑波体育③ 逞しい精神、高い倫理観の育成 9件
協同プレーの価値理解とコミュニケーション能力の向上 25件	ストレス対処とポジティブ感情の喚起 10件	筑波体育⑤ 自立的に自己を成長させる力の涵養 25件
他者と声をかけあうことで、皆で戦っている感覚が生まれ、よいプレーが出やすくなっていた。皆で協力して勝とうとする経験ができ、心からソフトボールを楽しめた。人見知りの自分がチームでプレーしていく中で、スポーツをともに楽しむという感覚がわかるようになった。など	野球経験の有無や男女の壁を超えて楽しむことができた。チームメイトと勝ちをめざしたことで、体育以外の授業では得ることのできない充実感を得た。内気で人見知りな自分が、この授業を受ける前より明るくなったというか、積極的に話せるようになった。など	挑戦することの大切さの実感 9件 最後までしっかりボールを追う等、最初から諦めないことを学んだ。たまによいプレーができるようになった。うまくいかなくても挑戦しようという気持ちが湧いてくるようになった。できないことも頑張って挑戦する気持ちが強くなった。など

学修者の記述コメントを、「筑波体育の教育目標①～⑤（資料2）」および「初年次体育授業の主観的恩恵評価尺度（西田ほか，2016）」項目ごとに整理した。西田ほか（2016）の主観的恩恵評価尺度で抽出された項目以外に、「挑戦することの大切さの実感」と「スポーツで考えることの重要性」が抽出された。

資料8 学修者の主観的恩恵、授業での経験、授業の雰囲気に関する尺度評価

尺度	下位因子	2022春 (n=39)			基準値		
		平均±SD (点)	平均 評定	Cohen d	平均±SD (点)	平均 評定	
初年次体育授業の 主観的恩恵評価尺度 (西田ら，2016) 7件法25問	運動スキル	33.2±4.1	5.5	***	1.32	27.8±6.6	4.6
	協同プレイ	37.6±3.1	6.3	***	2.52	29.7±6.5	5.0
	ストレス対処	24.5±3.1	6.1	***	1.27	20.5±5.0	5.1
	体力身体活動	31.3±4.8	5.2	***	1.13	25.8±6.6	4.3
	生活習慣	13.9±4.6	4.6		0.19	13.2±3.5	4.4
	合計	140.5±14.6	5.6	***	1.61	117.0±23.5	4.7
大学体育実技経験評価尺度 (島本・石井，2006) 4件法14問	自己開示	11.8±2.7	3.0	***	0.61	10.2±3.0	2.6
	他者協力	14.7±1.8	3.7	***	1.50	12.0±3.1	3.0
	挑戦達成	9.0±2.5	3.0	*	0.41	8.0±2.3	2.7
	楽しさ実感	10.4±1.5	3.5	**	0.53	9.5±2.0	3.2
	合計	45.8±7.1	3.3	***	0.86	39.7	2.8
大学生用動機づけ雰囲気尺度 (永田ら，2016) 5件法12問	熟達志向的雰囲気	25.9±2.9	4.3	***	1.37	21.9±3.8	3.7
	成績志向的雰囲気	10.2±3.0	1.7	**	-0.52	11.8±4.3	2.0

*p<.05, **p<.01, ***p<.001：各先行研究における基準値との有意な差を示す。

も、大きな効果とみなされる0.80を超える項目が多くを占めていたことから、自己成長をはかる大学体育（橋本ほか，2021）としての一定水準を保証していたといえるだろう。

■めざす授業像「誰もが全力で接戦を楽しむソフトボール」への到達度

質問紙調査の最後に、この授業でめざした「誰もが全力で接戦を楽しめるソフトボール授業」への達成度について、受講者自身と授業全体の2つの視点から5段階で回答を求めた（1

まったくあてはまらない, 2 あてはまらない, 3 どちらともいえない, 4 あてはまる, 5 よくあてはまる)。その結果, 受講者自身は 4.62 ± 0.67 , 授業全体は 4.72 ± 0.46 であり, めざす授業像へは高い水準で到達していたものと考えられる。とはいえ, 以下に示す TA や授業参観者からのコメントのように, 授業改善の余地は十分に残されている。

■ TA および参観学生のコメント

2022 年度春学期授業におけるティーチング・アシスタント (TA) の大学院生 1 名と, 授業参観に来た学群生 2 名から, 当授業の「優れている点/改善できる点」の双方についてコメントを求めた。

- ・TA 大学院生 S くん 授業ごとに自身の活動や感じたことを振り返ることができ, 体育授業で行った運動や課題解決を通して自分がどう変化しているのか理解できる点。またその際に, 担当教員ひとりの視点ではなく, 研究によって明らかにされている学びにつながる視点からも振り返ることができる点。/スキルアップの時間を授業後半でも確保することでより技術向上につながると感じた。またその際に, デモンストレーションを生徒に行わせることでみんなの前で発表する経験としてもいいのではないかと思った。
- ・学群生 N くん (火 3 基礎 3 回目 5/6 @ 野球場) 受講生の運動量を歩数計で測るというのは良いと思った。学生自身は, 授業後に自分の運動量を数値として確認できるシステムであり, 教員も評価しやすい。歩数を稼ぐために無駄に動いている人もいたが, それも (先生の) 狙いではないかと感じた。/授業の進め方をわかっていない学生が多かったと感じた。野球やソフトボールのルールをあまり理解していないとはいえ, 練習時の戸惑い方を見ていると, もう少し授業前半での説明が必要ではないかと思った。
- ・学群生 K くん (月 4 発展 4 回目 5/16 @ 体育館) 体育館の限られたスペースを有効に活

用しており, 捕球・送球・打撃すべての基本動作の練習が行われていた。特に良いと思ったのが学生同士でどうすれば動作が良くなるのか活発に会話がなされていたことである。/トスバッティングの打球が, ペッパーを行っている方向に行ってしまう場面があったため, トスバッティングの方向を変えて安全性に (もっと) 注意するべきだと感じた。トスバッティングで, 打撃メインなのか守備メインなのかわかっていない学生がいたため, 練習目的を明確にするべきとも感じた。

このように, 学生へのインストラクションの際, 学習者の注意を獲得し, 学習者の準備を整えることの不足する場面があったことがわかった。これに対しては, インストラクショナルデザインの基本として知られる「ガニエの 9 教授事象 (ガニエ, 2007)」の第一に挙げられる事項である。今後の対策としては, インストラクショナルデザインの理論に基づくチェックリストを用意するなど, 授業者 (私) 自身の教授法を, 自分自身だけでなく, TA によって定期的にチェックしてもらうことが考えられる。

V 今後の目標

■短期目標 (1-3 年以内)

- ・筑波大学体育センター紀要「大学体育研究」に, 今回作成した TP を今年 10 月までに投稿する。
- ・それを見た体育センター同僚教員 (あるいは他大学の体育教員) が TP に興味を示し, 来年以降, この WS に 1 名以上が参加する。
- ・2 年後の 2024 年 9 月に, 大学体育ソフトボール授業を題材にした教育研究課題で科研費申請し, 採択される。

■長期目標 (5-10 年後, あるいは読者へ託す夢)

- ・大学体育ソフトボール授業の TP 集を書籍化する。
- ・大学体育教員の多くが定期的に当然の如く, 主体的に TP を執筆する世の中になる。
- ・大学教員の採用や昇任の条件に TP が位置づ

- く高等教育界になる。
- ・ 体育を必修に戻す大学がどんどん増えていく。

VI 添付資料一覧

- 資料1 WS発表のカバーページ（教育理念の概要）
- 資料2 筑波大学体育センターの教育目標「筑波体育」（木内，2020）
- 資料3 2022春の授業リーフレット
- 資料4 ソフトボールの試合風景（写真）
- 資料5 ソフトボール簡易スコアシート
- 資料6 授業アンケート集計結果（2019春）（木内，2020）
- 資料7 自己成長を促した体験に関する学修者の記述回答（木内，2020）
- 資料8 標準化尺度による質問紙調査
- 資料9 ワークショップ修了証
ティーチング・ポートフォリオ 以上

おわりに

2020-2022年の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行を経て、大学における体育授業や運動部活動が学生の成長に重要な役割を果たすことが改めて認識されている（木内，

2023）。わが国の高等教育に大学体育や大学スポーツが将来にわたって継続して堅固に位置づいていくためには、優れた事例の集積が望まれる（木内，2021）。それには、実践事例の中身が具体的に他者から閲覧できるものとして数多く存在する必要がある、現状では質より量の追求を優先するべき段階といえる。このような背景のもと、拙稿を省みず自らのTPを掲載することとした。TPとしての出来栄は、皆本（2016）による「TP評価のためのルーブリック案（表2）」を参考に評価いただければと思う。まだまだ、である。

TPは、教育業績の評価資料であると同時に教育改善を促す手段である（栗田，2020）。また、教員のリフレクションに基づく教育活動を他者に伝える1つの「型」としても機能できる（栗田，2021）。自身の研究活動を研究論文にすることと同様に、大学教員が日々の教育活動をTPとして書き残し掲載する事例集積の場が、繰り返すが必要になる。その候補として、各大学発行の「紀要」が考えられる。紀要掲載論文を研究業績として扱わない大学もある現実を踏まえた、紀要の新たな役割の提案ともいえる。筑波大学体育センター紀要である本誌「大学体育研

資料9 ワークショップ修了証



表2 ティーチング・ポートフォリオを評価する際のルーブリック例（皆本，2016）

評価項目	優れている（3点）	妥当（2点）	やや不十分（1点）	不十分（0点）
教育の責任に関する記述	教育の責任が簡潔に分かりやすく書かれており、損愛用も必要十分である。	教育の責任がおおむねまとまってはいるが、読み手が理解するにはもう少し構成を考えるべきである。	教育の責任が記載されているが、冗長で、分かりづらく、構成を修正すべきである。	教育の責任が、ただ単に経歴や科目一覧になっており、全く構成が考えられていない。
教育理念とTP構成要素との関連	教育理念が中心的なテーマ、あるいは教育方法以降のTP構成要素すべてに深く関連している。	教育理念とTP構成要素がおおよそ関連づけられているが、関連は弱い、あるいは明瞭ではない。	教育理念とTP構成要素が関連づけられていない。	教育理念が記載されていない。
教育方法	代表的な教育方法や学習活動の例（例えば、講義例、トピックス例、グループワーク例など）が、学習到達目標や学習環境に応じて適切なものになっている。	代表的な教育方法や学習活動の例を、学習到達目標や学習環境に応じて変えてはいる部分もあるが、同じ方法で行っている部分もある。	教育方法や学習活動の例が学習到達目標あるいは環境にかかわらずおよそ同じである。	教育方法や学習活動に関する記述がない。
教育方法とTP構成要素との関連	教育方法が教育理念や学習到達目標と密接に結びついている。	教育方法が教育理念や学習到達目標と結びついて入るが、つながりが十分ではない部分がある。	教育方法と教育理念や学習到達目標との結びつきが漠然としている、あるいは弱い。	教育方法が教育理念や学習到達目標とは結びついていない。
教育成果の提示方法	提示されている質的評価や量的評価のデータが明瞭で分かりやすい。	提示されている質的評価や量的評価のデータがおおむね分かりやすい。	提示されている質的評価や量的評価のデータが分かりづらい。	質的評価や量的評価のデータが視覚的にまとめられていない。
教育成果とTP構成要素との関連	教育成果を示すデータが教育理念や学習到達目標と関連づけられている。	教育成果を示すデータが教育理念や学習到達目標と関連づけられているが、関連付けが十分ではない。	教育成果の分析があまり行われておらず、教育方法と学習到達目標との関連もほとんどない。	教育成果を示すデータが全くない。
教育者としての目標	教育目標が教育方法や教育成果と密接に結びついている。	教育目標が教育方法と教育成果と結びついているが、関連が十分ではない。	教育目標がありきたりで、教育方法と教育成果との関連もほとんどない。	教育目標が教育方法や教育成果と全く結びついていない。

究」は、投稿区分の総説、原著論文、研究資料、報告の他に、2019年から「ティーチング・ポートフォリオ」と「コーチング・ポートフォリオ」を新設し、全国の大学教員による体育授業や運動部活動に関する教育／指導実践記録の集積の場を提供している（木内，2021b）。しかしながら、本誌においてこれまでポートフォリオとしての報告はまだ2編（木内，2020；2021a）と少ない。筑波大学体育センターはFD活動の一環として、TP執筆の準備としてのTPチャート（栗田，2021）作成研修会を開催し、TPの普及に努めている（奈良ほか，2023）が、道半ばである。TPを教育の情報共有、教育改善に結びつけていくための場として各大学の紀要や本誌が機能すること、そして本稿を踏み台に1

人でも多くの教員がTP執筆されることを願う。

付記

大阪公立大学高専 TP 作成 WS のリーダーでありスーパーバイザーの北野健一先生、メンターとして私の教育理念を掘り起こして下さった鯉坂誠之先生をはじめ、本 WS の運営にご尽力いただいた先生方、本 WS を受講された同士の先生方、そして本稿の資料整理でご助力いただいた木内研究室大学院生の松浦稜氏、みなさまに心よりお礼申し上げます。

文献リスト

ガニエ,R.M., ウェイジャー,W.W., ゴラス,K.C., ケラー,J.M., インストラクショナルデザイ

- ンの原理. 鈴木克明, 岩崎 信 (監訳), 北大路書房, 2007.
- 橋本公雄, 西田順一, 木内敦詞, 堤 俊彦 (編著), 自己成長をはかる大学体育: 挑戦的課題達成型体育授業の理論と実際. 花書院, 2021.
- 早川 潔, 松永博昭, 谷野圭亮, 鯨坂誠之, 北野健一, 2022年度ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告. 大阪公立大学高専研究紀要, 57, 43-46, 2024.
- 木内敦詞, ライフスキル獲得に関連する授業内の経験を振り返る大学体育ソフトボール授業: 自己開示, 他者協力, 挑戦達成, 楽しさ実感に着目して. 大学体育研究, 42, 3-14, 2020.
- 木内敦詞, ティーチング・ポートフォリオ・チャートの大学体育への適用: 教職歴30年の大学教員の事例報告. 大学体育研究, 43, 137-144, 2021a.
- 木内敦詞, 学生対象の調査データを活用したSoTLのススメ, 体育の科学, 71 (6), 396-402, 2021b.
- 木内敦詞, 大学の実技科目から考える低頻度の運動の役割: コロナ禍から学ぶ大学体育の価値. 体育の科学, 73 (8), 510-515, 2023.
- 栗田佳代子, ティーチング・ポートフォリオって何だろう? <http://a4tp.info/wp-content/uploads/2019/08/TP-リーフレット-2019.pdf>, 参照日2023年12月24日.
- 栗田佳代子, 大学教員の教育業績評価の方法としてのティーチング・ポートフォリオ, 大学評価研究, 19, 55-63, 2020.
- 栗田佳代子, リフレクションを可視化するティーチング・ポートフォリオ・チャート作成講座. 医学書院, 2021.
- 前野隆司, 実践ポジティブ心理学: 幸せのサイエンス. PHP新書, 2017.
- 皆本晃弥, ティーチング・ポートフォリオ導入・活用ガイド. 近代科学社, 2012.
- 皆本晃弥, ティーチング・ポートフォリオによる教育業績評価. 医学教育, 47 (2), 89-96, 2016.
- 永田直也, 山内 賢, 佐々木玲子, 加藤大仁, 近藤明彦, 大学教養体育における運動・スポーツに対する動機づけと授業における動機づけ雰囲気の関係. 慶應義塾大学体育研究所紀要, 54, 17-24, 2015.
- 中原 淳, 働く大人のための「学び」の教科書. かんき出版, 2018.
- 奈良隆章, 河合季信, 神藤隆志, 仲澤翔太, 工藤重忠, 金谷麻理子, 三橋大輔, 永田真一, ティーチング・ポートフォリオ・チャート作成研修会の実践報告. 大学体育研究, 45: 1-6, 2023.
- 西田順一, 橋本公雄, 木内敦詞, 堤 俊彦, 山本浩二, 谷本英彰, 体育授業における大学生の主観的恩恵評価およびその大学適応感に及ぼす影響性. 体育学研究, 61, 537-554, 2016.
- 大阪府立大学高専ティーチング・ポートフォリオ研究会 (編著), 実践 ティーチング・ポートフォリオ スターターブック: 実質的な教育改善活動を目指して, エヌ・ティー・エス, 2011.
- 大阪工業大学硬式野球部ウェブサイト, <http://www.osaka-it-bbc.com/about/>, 参照日2023年12月23日.
- Richardson K, アダプテーションを通じたゲーム修正, 鈴木直樹, 濱田敦志 (編) 体育で実現する「ホンモノ」の「ゲーム中心の指導アプローチ」- 第6回国際ゲームセンス学会の成果より -, 創文企画, pp.16-20, 2021.
- 島本好平, 石井源信, 体育の授業におけるスポーツ経験が大学生のライフスキルに与える影響. スポーツ心理学研究, 34 (1), 1-11, 2007.
- 筑波大学体育センター, 筑波体育の理念. https://www.sapcc.tsukuba.ac.jp/?page_id=134, 参照日2023年12月20日.